The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	体育教師志望のプロセスに関するフェミニスト的考察：身体の抑圧に抗するための体育の実現に向けて
Author(s)	三上, 純
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101607
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　三上　純　）	
論文題名	体育教師志望のプロセスに関するフェミニスト的考察：身体の抑圧に抗するための体育の実現に向けて

論文内容の要旨

本研究の目的は、体育教師におけるジェンダー規範の身体化のプロセスについて、特に中学校・高校の運動部活動経験に焦点化して明らかにすることを通じて、身体の抑圧に抗するための体育のあり方について考察することである。

序章では、まず体育におけるジェンダー平等を「男女共習か男女別習か」という枠組みで捉えることの限界を指摘し、実際に児童生徒が体育で何を学び取っているのかを見ていく必要性に言及した。体育における抑圧の実態を明らかにしてきた研究をみると、その抑圧に体育教師が加担してしまう状況があることが理解できる。他方、そのような状況の改善を考えるうえで体育教師教育の必要性に繰り返し言及されてきたが、体育教師という職業は高度にジェンダー化されており、その職業に参入・適応していくことはジェンダー規範を身体化するプロセスでもある。また、体育教師が生み出される重要な検討対象は中学校・高校の運動部活動であることを明らかにする研究も行われている。以上を踏まえ、ジェンダー規範を身体化することによって抑圧の一端を担っている体育教師に、その抑圧の除去を求めるという議論は、堂々巡りに陥ってしまっているのではないかという問題提起を行い、本研究の目的を提示した。

第1章では、本研究の目的を達するための具体的な検討課題を導出するために先行研究の検討を行った。検討の対象としたのは、英語圏および日本における「体育教師の社会化」のリクルートメント段階に焦点を当てた研究、その段階についてジェンダーの視点から検討した研究、運動部活動とジェンダーに関する研究、性的な「ジョーク」の原理と機能について論じた研究である。これらの先行研究から、性的な「ジョーク」や日常的なトレーニングなどの実践といった運動部活動経験を通じてスポーツの価値を受容することで、ジェンダー規範を身体化した体育教師が再生産されることが推測されるが、このようなプロセスを想定して行われた研究は確認できない。この現状を踏まえて、中学校・高校の運動部活動における日常的経験のなかでいかにジェンダー規範が身体化されていくのか、それがなぜ体育教師志望に通ずるのかを明らかにすることを本研究の課題とし、5つの検討課題を提示した。そして、この検討課題に取り組むための方法（グループ・インタビュー、アンケート調査、インタビュー調査）について説明した。

第2章では、理論と分析の枠組みを整理した。具体的には、本研究の根底にある問題関心を反映しながら具体的な検討課題に取り組むために必要な「抑圧」「身体」「ミソジニー」「ホモフォビア」といった概念と、これらの概念に「スポーツ」がいかに関連するのかを論じた。まず、構造的不正義としての抑圧の特徴と、抑圧に対する責任を果たす方法について確認した。続いて、フェミニスト的な身体の理論について、セックス／身体の社会的構築の意味を整理し、「ジェンダー規範の身体化」「ジェンダー化された身体の物質化」という分析の枠組みを提示した。さらに、ホモソーシャリティという概念について検討することを通じて、ミソジニーとホモフォビアをいかに捉えるかを整理した。最後に、スポーツとジェンダーの関連を歴史的な経緯に目を向けながら整理することで、フェミニスト的にスポーツを分析することの意味を確認し、本研究の立場を明確にした。

第3章では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を含む日常的実践が、ジェンダー規範の身体化と関連するのかということを検討した。まず、グループ・インタビューの分析から、とりわけ男性運動部集団におけるミソジニスティック／ホモフォビックな会話の実態を確認した。続いてアンケート調査の分析により、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動と性差別意識との関連について検討した。その結果、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動が、女性やゲイに対する性差別意識と関連していることが示された。また、他の変数を統制したすべての分析において、生物学的本質主義が有意な関連を示していた。このことから、ミソジニーやホモフォビアを通じた女性の性的客体化や欲望の異性愛化は、自然化され明確に区別された男女の差異を必要としており、またそれを物質化すると考えられた。第3章補論においては異なるデータによる同一の分析を行い、その結

果について考察した。

第4章では、第3章において運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動が、ジェンダー規範の身体化と関連することが示されたことを踏まえて、そのような経験が体育教師志望といかに関連するのかという観点からアンケート調査の分析を行うことによって、ジェンダー規範の身体化につながる運動部活動文化を、体育教師志望の問題として捉えうるかを検討した。分析の結果、体育教師志望に与える様々な運動部活動経験の影響は運動部顧問志望に媒介されて生じること、運動部活動における体育教師との結びつきが体育教師志望に影響することが示された。さらに、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動は、運動部顧問志望の規定要因となることで、間接的に体育教師志望と関連することも示された。したがって、ジェンダー規範の身体化に通ずる運動部活動文化は、運動部顧問志望を経由することによって、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産に通ずることが明らかになった。

第5章では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動は、どのように意味づけられることによって、ジェンダー規範の身体化と体育教師志望につながるのかを、インタビューデータの分析から検討した。ホモソーシャリティとジェンダー規範の身体化／ジェンダー化された身体の物質化という枠組みを用いて分析を行った結果、特に男性運動部集団においてはミソジニーとホモフォビアを通じてホモソーシャリティが構築されており、それがジェンダー規範の身体化／ジェンダー化された身体の物質化のプロセスであることが示された。また、女性運動部集団における性や恋愛に関する会話・言動も確認されたが、それは男性運動部集団の場合とはまったく異なるかたちで行われていた。しかし、ホモソーシャリティという概念を念頭に置けば、そのような差異自体が男女間にある権力関係の反映であると考えられた。そして、そうした差異がありながらも、いずれも性や恋愛に関する会話・言動を行えること自体が特別な関係の表明であると認識されている点で共通しており、そのような会話・言動を多く経験することはジェンダー規範を身体化しながら運動部顧問や体育教師を志望するプロセスでもあることが示された。

第6章では、運動部活動におけるトレーニングや指導のあり方などの日常的実践を通じてジェンダー規範が身体化されるプロセスを分析し、それが体育教師志望といかに関連するのかを、インタビューデータの分析から検討した。体育教師志望の動機、運動部活動における指導のあり方や指導者からの声かけ、筋肉質な身体の「感じられ方」などに着目した分析から、体育教師志望のプロセスが運動部活動を通じたスポーツの価値の受容と指導者との信頼関係の構築に支えられていること、それらは同時に、運動部活動におけるジェンダー規範の身体化とジェンダー化された身体の物質化のプロセスを支えるものでもあることが明らかになった。さらに、男女共習／別習をめぐる協力者たちの語りからは、運動部活動を通じてジェンダー規範を身体化してきた体育教師志望者にとって、体育とスポーツが区別しがたいものであること、ゆえに、スポーツに内在する差別を生み出す構造がそのまま体育へと敷衍される状況が理解できた。したがって、運動部活動を中心とした体育教師志望のプロセスは、ジェンダー規範を身体化した体育教師が生み出されるプロセスでもあることが示された。

第7章では、体育教師教育の効果の限定性を指摘する先行研究が、現に体育教師である人や、体育教師を志望している人だけを対象としてきたことを踏まえて、体育教師を志望して教師教育に参入しながらも、そこでジェンダー規範を問い直す経験をした後に、体育教師という職業から離れていった人の語りを分析することにより、体育教師教育が果たす役割について論じるとともに、ジェンダー規範を身体化した体育教師が再生産される背景について検討した。分析の結果、体育教師教育には、そこに参入する以前の経験と照らし合わせながらジェンダー規範を問い直す可能性があると考えられた。しかし、協力者は教員採用試験の経験を踏まえて体育教師を志望することを断念していた。その経験は、体育・スポーツにおけるジェンダー規範を問い直し、それに使命感をもって体育教師を志望する人を歓迎するような土壌が、体育にはほとんどないことを示していると考えられた。この分析から、体育教師教育が有効に機能したがゆえに、結果として、ジェンダー規範を身体化した体育教師という集団が再生産される側面があることが理解できた。この分析結果については、スポーツに内在する差別的構造と、それをそのまま教育現場に敷衍させる体育という教科の問題であると考察した。

終章では、本研究から得られた知見を整理するとともに、先行研究に対する応答と実践的な示唆について議論を行った。まず、本研究の根底にある「なぜ体育教師が抑圧の担い手となってしまうのか」という問いについて、体育教師という職業が運動部活動経験を通じて受容されたスポーツの価値を土台として志望されることによって、スポーツの規範が否応なく体育授業に持ち込まれるという先行研究の知見が基本的に支持されると考えられた。しかし、先行研究には、体育教師志望、ジェンダー規範の身体化、指導者との信頼関係の構築、スポーツの価値の受容などがどのように関連し合っているのかという点が不明瞭であるという限界があった。それに対して本研究は中学校・高校における運動部活動経験を通じて体育教師になっていく人たちの経験や、そこで身体化された規範を問い

直して体育教師という職業から離れていく人の経験に目を向けることで、それらの複雑な関連について考察することができた。また、本研究では運動部活動でジェンダー規範が反復される際の矛盾や葛藤を描くことによって、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産に抗するための知見を得ることに注力した。そこから、矛盾や葛藤が可視化される可能性や、体育教師教育においてジェンダー規範を問い直すことのできる可能性をいかに広げていくことができるのかということが決定的に重要なのではないかと論じた。そして、そのような可能性を広げていくための道筋として、学習指導要領レベルでの変革、体育教師集団としての生活綴方教育の実践、体育教師個人が実践可能な取り組みの可能性について論じた。最後に、本研究が抱える課題について整理した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　三　上　純　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	木村　涼子
	副 査	教授	北山　夕華
	副 査	教授	岡田　千あき

論文審査の結果の要旨

本論文は、タイトルに「フェミニスト的考察」という言葉が含まれているが、申請者が「フェミニスト的考察」によってあぶりだしたかったのは、現在の体育と「身体に対する抑圧」との関係である。体育教師とは、「身体に対する抑圧」を実践してしまう存在として仮に定められる。本論文は、これまでのジェンダーの視点からの体育・スポーツ研究を踏まえた上で、学生が「身体を抑圧」する（危険性がある）体育教師を志望するプロセスに更に焦点を当て、それをジェンダーやセクシュアリティとの関係で読み解こうとする意欲的な研究である。

問題意識を呈示した序章に続いて、先行研究をまとめた第１章と、理論と分析枠組みを整理した第２章は、非常に厚みのある読み応えあるものとなっている。先行研究については、体育やスポーツ、身体、ジェンダーに関する先行研究を実証的なものから理論まで国内外の広範な文献を綿密にまとめあげている。海外においても、スポーツとジェンダー、身体に関する研究はこの二十年ほど大きな進展を遂げて、注目されるべき研究潮流となっているが、本論文はその流れをさらに先にすすめるものと評価できる。

テーマに関わる諸理論をあつかった第２章では、「抑圧」「身体／ジェンダーとセックス」「ホモソーシャリティ」など、本論文が用いる基本概念を明確に定義するために必要な理論的前提を整理し、骨太の議論を展開している。従来の体育学では、漠然と前提とされたり、あるいは不可視化されたりする傾向のある概念を、論文の前半で綿密な文献読解を通じて析出しようとする試みは成功しているといえよう。また、身体への抑圧とフェミニスト的考察を結び付けるキーワードとして、ホモソーシャリティ、ミソジニー、ホモフォビア、性的なジョークなどの概念や問題群が整理され、第３章以降の実証分析の枠組みと具体的な検討課題が「運動部活動」と「体育教師志望」との関連として明示されるまでの議論が堅実に展開されている。

「体育教師のジェンダー規範の高度な身体化」は多くの先行研究で指摘されているが、いかに規範の高度な身体化が惹起し、促進されたのかを問いとした研究は、確かにこれまでほとんど見られていない。「文化」「伝統」「常識」などに覆い隠される規範の身体化のプロセスを明らかにすることは、そこに疑問を持たない者が大多数を占める世界におけるコンフリクトにもなり得るため、小さなステップを積み重ねる地道な研究手法が求められる。自らがその世界の内側を理解しつつも規範の暴力性を認識し規範を支える構造を問い続けるためには、当事者意識と客観性の両立が必要であり、本研究の最も評価できる点の一つはそこにあると考える。

第３章と第４章は、アンケ―ト調査とグループ・インタビューの組み合わせによって、運動部活動経験での恋愛や性に関するコミュニケーションと性差別意識の身体化、さらには体育教師志望と関連があることが明らかにされる。アンケート調査から体育教師との関係性（および性的な会話）を媒介した体育教師志望という傾向を明らかにし、さらに質的データを用いてその内実を描き出している。第５章から第７章までは、インタビュー・データを用いて、男性運動部集団内での性的な「ジョーク」の実態、運動部活動経験と体育教師志望との相関関係、運動・スポーツ的価値とジェンダー規範の身体化、固定的なジェンダー規範や性的マイノリティへのフォビアについて疑念は体育教師志望を冷却させる因果関係などが、知見として示される。一部は実証が困難で次の課題として残されたものの、仮説がおおむね支持され、その上で「被抑圧者の声を奪うことで進行するプロセスである」と結論付けられた。

体育教師を志望するプロセスは多様な要因がからむ複雑なものであるにもかかわらず、だからこそ、研究課題を多層的なリサーチクエスチョンとして分解し、一つ一つのリサーチクエスチョンに各章でデータの限界を踏まえつ

つ、回答を出すスタイルをとっている。検証については、いずれもオリジナルデータを用い、新規性のある知見を論拠に基づき提示することができている。アンケート調査の分析では多変量解析をおこない、インタビュー・データについては質的分析ソフトMAXQDAを用いて可能な限り客観的かつ包括的な分析を志すなど、データの分析手法も手堅い。量的調査と質的調査の両者を用いた混合研究法を用いているが、各手法の長所と欠点を理解した上で相互補完的に採用されたことで論の厚みが担保されている。

結論として、「スポーツの価値の認識」と「指導者との信頼関係」を元にした「ジェンダー規範の身体化」が体育教師志望の一つの要因であることが示された。他の動機や経験の影響の有無はもちろん大きな論点であり、今後の課題として残されているが、論を通じて描き出されたジェンダー規範の身体化のプロセスは、体育教師のみでなく、スポーツ「指導者」や「関係者」を進路として選択する過程の検証にも援用可能である。また、本研究は、体育教師志望のプロセスに焦点を絞ったものであったが、描きだされた「体育」「スポーツ」の抑圧的な構造や無意識の暴力の表象は、ジェンダーとスポーツ研究に留まらないスポーツの清濁をあぶりだすという点で高く評価することができる。

本論文は、問題をあぶりだすにとどまらず、最後に「身体の抑圧に抗する教育」としての体育を構想する。研究の問題意識として、体育教育ひいては学校教育全体の発展に寄与することを志した研究であるという点でも意義深い。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。